慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 経済の停滞と没落 : 歴史的視点から |
| Sub Title | Decline and fall in economic history |
| Author | 岡田, 泰男 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1999 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.92, No.1 (1999. 4) ,p.3- 19 |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19990401-0003 |
| Abstract | |
| Notes | 小特集 : 経済史シンポジウム : 経済史における「停滞」と「没落」 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19990401-0003 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」92巻1号（1999年4月）

# 経済の停滞と没落*

## ――歴史的視点から――

岡　田　泰　男

## 一

経済の停滞や没落は，あまり人気のあるテーマではない。経済成長論や発展論については数多くの著作があるが，経済停滞論とか経済没落モデルといったものは目にすることが少ない。景気循環論にしても，後退の局面の後には拡大が訪れるのであり，景気後退が永遠に続くわけではない。経済史の分野を見ても，資本主義の成立と発展であるとか，工業化の進展という問題が主にとり上げられてきたのであり，衰退や衰亡はそれほど研究者の関心を集めてこなかった。これには一般的にいって暗いテーマよりは明るい話が，あるいは下降よりは上昇が好まれるという心理的要因も関わっているであろうが，それだけとはいえない。第2次大戦後，先進諸国では全般的に経済成長が続いたこと，他方，後進諸国では経済発展が求められたことが，経済学者を含め人びとの目を成長と発展へ向けさせたのである。

しかし，今日では，経済の停滞や没落も大きなテーマであり，現実的課題にも関わりを持っていることは多くの人の認めるところであろう。衰退や没落の研究がなされぬかぎり，そこから脱け出したり，それを防いだりすることは困難に違いないからである。もっとも，この問題をとり上げるにあたっての私の意図は，苦境から脱出するための方策を探るというような建設的なものではない。むしろ経済史の立場から，停滞や衰亡という現象を眺めてみようというにすぎない。さらに，それが単に暗い陰気な話ではなく，停滞期や没落期は，美しい芸術が生まれ，人びとにとって意外に住み心地の良い時代だったことにもふれたい。

---

＊　本稿は1998年1月，三田で開催された慶應義塾経済学会大会での講演に筆を加えたものである。コメントを寄せられた諸氏に感謝する。

## 二

私の恩師，高村象平先生はドイツ・ハンザの研究者でいらっしゃったが，かねがね衰退期や没落期が面白いと云っておられた。ハンザ都市において，立派な市庁舎が完成したり，市参事会がメンバーの選挙を仲間うちでするようになると，それは没落期に入ったしるしだというようなことを，伺った記憶がある。その頃，慶應義塾は百年祭で，当時の感覚からすれば立派な校舎を建てていたので，何となくくすぐったい思いをした。私自身はアメリカ経済史，とくに西部のフロンティアの研究を専門に選んだが，西部開拓期の19世紀アメリカは，工業化，都市化の進んだ時代であると共に，その裏で東部の農村が没落した時代だった。それゆえ，西部の発展に注目すると同時に，西部との競争に破れ，没落しつつある東部の農村にも興味を持った。それについて，いくつか論文は書いたが，とくに停滞や没落を一般的に考察したわけではない。(1)

先に記したように，経済史の分野では資本主義の成立と発展が，最も多くの研究者をひきつけたテーマであった。もちろん，歴史学にあっては，ローマ帝国の没落はギボンの『ローマ帝国衰亡史』以来，最大の問題の一つであるし，スペインやオランダの衰退も注目をひいてきた。経済史でも問屋制の衰亡や産業革命期の手織工の没落は，しばしば語られてきた。とはいえ，衰退や没落が語られるとしても，主たる関心の的が成長や発展にあったことは否めない。例えば14・15世紀のヨーロッパ経済の衰退は良く知られた現象であるが，これは封建制の衰退であって，実は資本主義が芽生えつつあったのだといわれる。また問屋制の衰亡にしても，古い商業資本は衰えつつあったが，新しい産業資本が勃興しつつあった，という具合である。経済発展論における貧困の悪循環という概念は，まさに停滞を対象としているが，それ自体が重要なのではなく，いかにしてそこから脱出するかが問題であった。

ところで，経済の停滞，衰亡，没落がメイン・テーマになってこなかったことは事実としても，近年それへの関心が高まってきたことがうかがわれる。「英国病」という言葉がいつの頃からか流行し，イギリスの衰退について，さまざまな議論がなされたことは知られる通りである。先年，慶應義塾を訪問されたアレック・ケアンクロス教授も，暖房のきかない三田演説館の寒さの中で，英国病について講演をなさった。アメリカの場合も一時期，衰亡に関心が高まった。ポール・ケネディーの『大国の興亡』がベストセラーになったのも，人びとが興亡の「亡」に関心を持ったからであろう。私はたまたまケネディー教授が同書を執筆中にイェール大学にいたので，毎週シェリーを

---

(1) 高村象平『ドイツ・ハンザの研究』（日本評論新社，1959年）の第3篇，第4篇はドイツ・ハンザの没落を扱っている。

飲みながら雑談する機会があった。高校生の息子がいるので大学進学にお金がかかるとこぼしてはいたものの，あれほどのベストセラーになるとは，本人も思っていなかったに違いない。また，最近は自らを歴史経済学者と称しているキンドルバーガーの新著も，近代における経済的主導国もしくは覇権所有国の変遷を追ったものであるが，衰亡の過程に注目している。ソ連の崩壊，日本を含めたアジアの経済危機も，衰退や没落の研究にとっては，良い機会を提供してくれたというべきであろう。(2)

さて，経済の没落が，それ自体として研究対象になりうるとして，一つ注意しておくべき点は相対的没落と絶対的没落との区別である。没落とはいえ，しばしばそれは相対的なものと考えられている。例えばイギリスの場合，19世紀末における産業的覇権の喪失は，ドイツ，アメリカの経済成長が著しかったためで，イギリスは成長を維持したし，国民所得の水準も高かったことが指摘される。第2次大戦後の状況にしても，他国に比べて成長しなかったとはいえ，その生産性の伸びは1世紀前に比べて2倍の速さだったといわれる。こうした相対的地位の低下，あるいは相対的没落は，キンドルバーガーの描いた主導国の変遷の中で常に見られたことである。しかし，すべての没落が相対的とはいえない。イギリスにしても，その衰退には絶対的な面もある。綿業，鉄鋼業などはその例といえる。絶対的没落の例として，ローマ帝国やハプスブルク帝国，ドイツ・ハンザ，さらにはソ連の崩壊，わが国の場合も徳川幕府の滅亡などをあげることができる。以下においては，相対的没落ではなく，むしろ絶対的なものに重点をおいて考えてみよう。

## 三

衰退や没落を考えるにあたって，とりあえず既存の理論を検討するのが当然の手順であろうが，すでに記したように経済衰亡論とか没落モデルなどというものはあまりない。もちろんシュペングラーの『西洋の没落』やトインビーの著作が思い浮かぶが，あまりに哲学的というか文明論的というか，壮大すぎて利用するのが難しい。そのため，ここでは歴史上のさまざまな衰退・没落のケースを，先ずいくつかの類型に分類し，その次に経済史的に見た没落モデルとでもいうべきものを示してみよう。没落の諸類型としては，(1)ポンペイ型　(2)ハプスブルク型　(3)「成功は失敗のもと」型　(4)ブッデンブローク型　(5)エゴイスト集団型，さらに類型とはいえないかもしれないが，最近の例として，(6)ソ連の場合をつけ加える。(3)

---

(2)　アレック・ケアンクロス「英国病」(『三田学会雑誌』86巻2号，1993年)；Paul Kennedy, *The Rise and Fall of Great Powers* (N.Y., 1987), (鈴木主税訳『大国の興亡』草思社)；Charles P. Kindleberger, *World Economic Primacy : 1500 to 1990* (N.Y., 1996).

（1）ポンペイ型

これはヴェスヴィオ火山の噴火によって消滅してしまったポンペイから名付けたものであるが，地震，噴火，洪水，あるいは外敵侵入のような突然の外部要因によるもので，没落のタイプとしては最も単純といえる。プラトンの記すアトランティスの話が伝説でないとすれば，これも典型的な例となろう。ローマがゲルマン人の侵入によって亡びたと考えるならば，ローマをここに含めて良いし，スペイン人に亡ぼされたアステカやインカの帝国も同じである。とりわけ，アメリカの先住民はスペイン人の武力よりは，彼らのもたらした伝染病によって大量死亡においやられたという説に従えば，外側からの災厄，突然の危機による没落というタイプに極めて適した例となる。もっとも外的要因は，しばしば内的要因と密接な関係がある。大洪水は森林の乱伐が原因となることが多いし，外敵の侵入にしても，それを招いた，もしくは防げなかった内部事情が存在する。ポンペイにしても，大噴火より以前の大震災の際には再建されたのであって，大噴火後，埋没されたままになってしまったのは，主産業たるブドウ酒やオリーブ油生産が行きづまっていたからだといわれている。(4)

（2）ハプスブルク型

これは帝国が拡大しすぎて，とくに軍事的に破綻したタイプで，ローマやイギリスにも当てはまるであろうが，ハプスブルク帝国が典型的な例である。ハプスブルク家は結婚や相続によって領土を拡大し，神聖ローマ帝国皇帝カール5世の時代には，スペイン，オーストリア，ネーデルランドから，イタリアの一部，ハンガリー，ボヘミアを支配した。当時のヨーロッパの人口の4分の1はハプスブルク家の領土で暮したという。しかもそれは貿易や金融の中心地を含み，アメリカからの収入も手に入った。しかし，この広大で分散した帝国を守ることには困難が伴う。外からはイスラムの攻撃があり，ヨーロッパの中でも30年戦争のように長期的戦争が続く。中世の騎兵による戦争は終了して，大量の人員を必要とする歩兵連隊の大規模な戦闘が一般的となり，海上でも重装備の

---

（3） 没落を扱った文献の中では，下記のものが最も参考となった。Carlo M. Cipolla, ed., *The Economic Decline of Empires* (London, 1970) ; Mortimer Chambers, ed., *The Fall of Rome* (N.Y., 1963),（弓削達訳『ローマ帝国の没落』創文社）。なお，トムソンは近著において，「ヨーロッパ型没落」について論じているが，これは繁栄の中心の移動に伴う相対的没落であって，本稿での類型とは異なる。ヨーロッパにおいては，ハプスブルク型の没落は例外というのが，その主張である。J. K. J. Thomson, *Decline in History : The European Experience* (Cambridge, U.K., 1998). また，大山道広教授から「合理的な選択によって没落する」タイプの存在について示唆を受けた。これは極めて魅力的なアイディアであるが，個人や企業でなく社会全体がそうした選択をした例が思い浮かばなかったため，ここにあげていない。(3)(4)(5)など，部分的にはそれにあてはまるかもしれない。

（4） Willem Jongman, *The economy and society of Pompeii* (Amsterdam, 1988) ; Alfred W. Crosby, Jr., *The Columbian Exchange : Biological and Cultural Consequences of 1492* (Westport, Conn., 1972).

軍艦が必要となる。こうして軍事費は増大するが，とくにこの時代は例の価格革命の時代であったのでコストは一層増した。しかも敵であるフランスやイギリスは個別の戦争の終了後，国力を回復することができたが，ハプスブルク帝国は休む暇もなく戦争を続けねばならない。戦うべき敵が多すぎ，守るべき戦線が広すぎたからである。こうして帝国は疲弊し，やがて崩壊したが，これはまさにケネディーの『大国の興亡』を読んだアメリカ人が，自国の姿と重ね合わせて恐れをいだいた没落のタイプであった。(5)

（3）「成功は失敗のもと」型

成功は失敗のもとと云うと，シュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』における議論を思いおこす人が多いに違いない。シュンペーターの経済発展論の中心は革新と企業者であるが，資本主義の発展につれ，革新は日常化され企業者の本来の機能は失われる。合理化の進展は資本主義の擁護者を消滅させ，他方，批判者は増える。さらに経済的成功を基準とする価値観も力を失い，いわば資本主義は自らの成功のゆえに自己崩壊するというのが，彼の見方であった。この議論は歴史的洞察力に満ちているが，歴史の分析とは異なる。没落の類型としての「成功は失敗のもと」が当てはまる事例は多いが，とりわけ産業革命後のイギリスが好例ではあるまいか。(6)

産業革命を終えて「世界の工場」となったイギリスは，先頭ランナーの運命として，やがてアメリカやドイツに追いつかれた。その頃，すなわち19世紀末にはかつて先駆者であったイギリスの工場設備や建物は古くなっていた。産業革命の開始期には，資本はあまりかからなかったので家族企業で十分であり，金融機関に頼ることも少なかった。技術もアマチュアや熟練工が活躍し，科学技術教育などとは無縁であった。世界で最も安い綿布，安い鉄，安い機械を生産したから，販売をまかされた商人は苦労せずに世界の市場を支配することができ，自由貿易は有利であった。いったん，こうしたスタイルで成功してしまうと，鉄道レールの狭いゲージを変えることが困難であるように，環境が変化しても，それに対応して自らを変えることは難しかった。

家族企業は保守的であり，銀行は工業に長期資金を提供しなかった。新技術が生まれていても，機械を廃棄して新しくしたり，工場を建てなおすことはなく，修理や部品交換が通例で，技師は1世紀前の蒸気機関がまだ動いていることを誇りにした。ドイツのような科学技術教育はおこなわれず，輸出市場における商人も保守的だった。一度は世界の工場であったため，イギリスは開放的となり，政治家や知識人も国際的指向性を持ち，自由貿易に有利な条件がなくなった後も，それに執着した。二度世界大戦を経たイギリスは，もはや世界の大国ではなかったにもかかわらず，第2次

---

（5） Kennedy, *Rise and Fall*, pp. 31-72.

（6） Joseph A. Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*, 3rd ed. (N.Y., 1950), (中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社).

大戦後も世界的役割を維持しようとし，ポンドを国際通貨として残したり，西側同盟国中，アメリカを除いては最大の軍事支出をしたりした。産業革命，そして世界の工場としての成功が，後の「英国病」の遠因となったというべきであろう。(7)

（4）ブッデンブローク型

これはトーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと――ある家族の没落』からとったものであるが，日本流にいえば「売家と唐様で書く三代目」となるであろう。こうした状況はしばしば見られる。ケインズは彼の時代のイギリスが三代目の人間に支配されていると考えたし，後に述べるソ連の場合にも革命を経験した世代とその後の世代との違いという問題がある。しかし，ここではもっと早い時期，ルネサンス期のイタリアや，18世紀のオランダの例をとり上げたい。

ブローデルは『地中海』の中で，「ブルジョワ階級の裏切り」と題して，商人が官職や公債や貴族の称号や封地を買い，貴族の生活にあこがれたことを書いているが，ヴェネツィアやフィレンツェの富裕な商人は，商業から土地に投資の対象を移し，企業家から地代生活者になってゆく。そしてその主たる関心は利潤の獲得から消費へ移っていった。かつて優れた商人はいつもインクで汚れた指をしていたが，その子や孫の世代には別荘で優雅な暮しをすることを好んだという。商売に失敗して没落した家系といえば当然メディチ家が頭にうかぶ。コジモ・デ・メディチはローマをはじめヨーロッパ各地に拡がる銀行と商業の王国をつくり上げたが，孫の代のロレンツォ・イル・マニフィコはメディチ家の銀行が破産しつつある中で詩作にふけったといわれる。いわゆる「地理上の発見」がイタリア都市の衰退をもたらしたことは，どの経済史のテキストにも書いてあるが，この時代，イタリアでは商売から手を引いた家に代わって，新しい商人が登場することもなかった。(8)

ところで，イタリアの繁栄を奪いとったオランダの場合にも同様なことがくり返される。オランダの黄金期といわれた17世紀には，海外貿易をおこなった商人は船主でもあり，自分の子供や親類を船に乗り込ませ，商業利潤の獲得に心をくだいた。しかし18世紀も中葉になると，オランダ人はただ船の持主として運賃を受けとるのみで，実際の貿易は外国人の手に握られた。そしてオランダの商人は，海へ乗りだすことを止め，安全な土地や債券を買って金利生活者となり，競争相手のイギリスへも投資した。オランダの凋落は技術面でも見られたのであって，17世紀にはオランダの技

---

（7） Peter Mathias, *The First Industrial Nation* (London, 1969), (小松芳喬監訳『最初の工業国家』日本評論社)；Andrew Gamble, *Britain in Decline* (London, 1981), (都築忠七・小笠原欣幸訳『イギリス衰退100年史』みすず書房)；ロイドン・ハリソン著，松村高夫・高神信一訳『産業衰退の歴史的考察』(こうち書房).

（8） Fernand Braudel, *La MEDITERRANEE et le monde mediterranéen à l'époque de Philippe II* (Paris, 1966) Tome 2, pp. 68-75, (浜名優美訳『地中海』藤原書店，III 118-132頁)；Peter Burke, *The Italian Renaissance : Culture and Society in Italy*, rev. ed., (Cambridge, 1987), (森田義之・柴野均訳『イタリア・ルネサンスの文化と社会』岩波書店)；Thomson, *Decline*, pp. 97-134.

術は他にぬきんでており，熟練工はいたるところで求められ，外国でも活躍していた。しかし18世紀も末になると，オランダ人自ら「われわれは，もはや発明家ではなくなった。以前は独創的なものを作っていたが，今やコピーを作るだけだ」と自嘲した。同じ頃ライデンの毛織物業者は，自国の業者が先取性に欠け，新しい技術や方法の採用に熱心でないことを嘆いている。(9)

ブッデンブローク家の最後の跡とりのヨハン少年（ハンノ）はピアノに熱中する芸術家気質の子であった。父親はそういう息子に不満で，曾祖父のように，明るく単純で強い人間になってもらいたいと思ったが，それはかなえられず，ヨハン少年は若くしてチフスで死んでしまう。物語の途中で，彼がブッデンブローク家の家系図の最後の自分の名前の下に定規をあて，金のペンでページの上へ斜めに平行線を引いてしまうエピソードが語られるが，それは事実となってしまった。初代は富を，二代目は名誉を，そして三代目は美を求めるという没落の類型は，個別の家族のみならず，社会全体にも当てはまる。

（5）エゴイスト集団型

これは社会のさまざまな集団，すなわち貴族であれ，ギルドであれ，あるいは現代の経営者団体，労働組合，医師会などであれ，自己の既存利益を守るために時代が求める変化に抵抗し，結局は社会全体の没落を招くというタイプである。理論的には，ネケディーの『大国の興亡』の数年前に出されたマンサー・オルソンの『諸国家の興亡』に述べられた特殊利益集団の考え方である。(10)

オルソンによれば，こうした集団は社会全体の生産するパイを大きくして自分たちの受け取る分を増やすことよりは，パイのより大きな部分を分け前として獲得することに熱心である。したがって社会全体の効率の上昇や生産の増大を目指さず，むしろ効率や生産を低下させても，自分たちの所得を増やそうとする。カルテルや圧力団体が，社会に負担を負わせて自らの利益をはかろうとする行動がこれにあたる。カルテルはより高い価格を求めて産出量を制限しようとするし，労働組合は自分たちの不利益になるような技術革新を受け入れようとしない。こうして利益集団は資源の効率的配分を妨げ，経済成長率を低下させる。さらに利益集団は排他的であり，社会全体の共通利益の増進よりは自分たちの分け前を多くしようとするので，分配をめぐる対立が激化し，政治的対立も高まることになる。オルソンは，こうした利益集団の排除が経済発展に結びつくことを述べるが，ここではむしろ，その存在が没落を招く面を強調しておきたい。

グラッドストーンは「国はしばしば眠っているのに，利益集団はいつも目をさましている」と云ったという。イギリスで労働組合，シティの金融勢力，その他さまざまな利益集団が衰退の原因と

---

(9) C. R. Boxer, *The Dutch Seaborne Empire, 1600-1800* (London, 1977).

(10) Mancer Olson, *The Rise and Decline of Nations* (New Haven, 1982), (加藤寛監訳『国家興亡論』PHP 研究所). 但し，邦訳では歴史に関する部分は省略されている。

されてきたことは周知のところである。アメリカにおいても1980年代，経済的後退の中で，改革を求める論者が「全土をおおう依存，庇護，保護，再分配のパッチワーク」を非難したが，政・財・官界からなる「鉄の三角形」は，その利益を手離そうとしなかった。最近のわが国における政治家，役人，財界人の制度改革への抵抗ぶりにも，エゴイスト集団の行動様式が良く示されている。ゴルバチョフのソ連にあっても，経済機関や官僚組織は，既存の利益を守ろうと改革に抵抗したのであった。

（6）ソ連の場合

ポンペイ型が外的要因による突然のカタストロフであるのに対し，ソ連の崩壊は内的要因による突然の破滅といってよい。しかしそれはロシア革命などとは異なる内部崩壊であり，今すぐ一つの類型としてよいか否かには疑問もある。また，部分的にはハプスブルク的，あるいはブッデンブローク的要素もある。ただ，それらには収まりきらぬ点もあるので別のケースとして扱いたい。

ギボンは「ローマ帝国が何故亡びたかを問うより，どうしてあのように長い間存続したかに驚くべきだ」と述べたが，ソ連の場合にもこの言葉があてはまる。ミーゼスが『経済計算論』において，社会主義の下では，計画経済を実行しようとしても，経済計算の基礎である価格がないので，資源の合理的配分は不可能だと述べたのは1920年のことである。ロバート・ハイルブローナーは1990年になって，ソ連の破局の究極の原因は計画経済が働かないからだと述べているが，それなら何故70年も長続きしたのか。共産党のプロパガンダとスターリンの恐怖政治のみが，それを可能にしたとは考えられない。しかも1914年には後進的農業国であったロシアが，ソ連の時代に工業化，都市化に成功したことも否定できない。(11)

アメリカの建国期も，わが国の維新期も若者の時代であったといわれるが，ロシア革命後のソ連も同じであった。ソ連の指導者たちは若い熱狂的支持者に支えられていた。1920年代，多くの若者は社会主義の正しさを信じ，ユートピアの実現は近いと考えた。マヤコフスキーの詩は革命的ロマンチシズムを唱い，ショーロフの『開かれた処女地』やエレンブルクの『第二の日』は，人びとの高揚した精神を描いている。若者にとって共産主義は世俗的宗教であり，ファシズムが多くの若者をひきつけたのと同様な状況が見られた。そして，モロトフ，ミコヤン，キーロフ，カガノヴィッチなどは30歳代で要職に就いた。やがて革命の熱気はさめるが，1930年代中葉の危機の時代には独裁も正当化される。若者は非政治的となり，一般の労働者，農民は不満はあっても反抗はしない。

---

(11) Edward Gibbon, *The Decline and Fall of the Roman Empire* (Everyman's Library edition) Vol. 4, p. 105,（村山勇三訳『ローマ帝国衰亡史』岩波文庫，第5巻401頁）; Lndwig v. Mises "Economic calculation in the socialist commonwealth," in F. A. v. Hayek, ed. *Collectivist economic planning* (London, 1935),（迫間眞治郎訳『集産主義計画経済の理論』実業之日本社）; Robert Heilbroner, "Reflections after Communism," *The New Yorker*, Sept. 10, 1990, pp. 91-100.

第2次大戦は国民の団結をもたらし，戦後の再建にも人びとは努めた。

1950年代，フルシチョフはアメリカに追いつき追いこすといった。しかし，1960年代から経済成長率は鈍化した。生産性の伸びはなく，革新は欠けていた。70年代には5ヵ年計画の目標は達成されず，教育，文化，保健など生活の質の面でも立ちおくれが目立ったし，農業も食料輸入が必要となった。しかし支配者層は現状維持を望み，改革に反対した。旧世代は保守化し，老人支配となったのであり，ここにブッデンブローク型の変化が認められるだろう。

他方，第2次大戦後のソ連は帝国化したため軍事コストもかかる。東ヨーロッパ，キューバ，ベトナム，アフガニスタン，さらに他の第三世界諸国への援助がある。長大な国境を持ち，敵にかこまれていると感じるソ連は，軍事競争から脱け出ることができない。人材と資源はソ連版軍産複合体にまわされ，軍事費は国民総生産の25パーセント以上をしめたといわれるが，これはアメリカの倍以上である。軍事費の大きすぎることが，国民生活や経済全体を圧迫しているが，これを縮少することは利益集団が許さない。フルシチョフの失脚の一因も軍事費のカットにあった。さらに帝国であるがため，民族問題もかかえている。もっともロシア帝国時代から，反ロシアの動きはあまりなく，ソ連成立後，民族主義者は自治，自律は求めても分離までは求めなかった。結局，民族問題はアキレスのかかととなったが，ハプスブルク型の崩壊が直ちに生じたわけではない。

ゴルバチョフが登場したとき，危機的状況は認められたが，崩壊を予想した者は西側にもいなかった。経済は不調であり，アフガニスタンでの失敗は明らかであり，チェルノブイリの事故は衝撃的であったが，すべては帝国をゆるがすほどではなく，東ヨーロッパも反乱にまではいたらなかった。崩壊前のソ連は革命前のロシアよりは強固に見えたのであり，ゴルバチョフが体制を維持しつつ改革ができると考えたのも無理はない。しかし彼はパンドラの箱を開けてしまったのであり，ヒットラーにも西側の攻勢にも耐えたソ連は，突然の破局を迎えた。(12)

ポンペイ型と異なり，内的要因による「突然」の没落というと，原因をさかのぼって探そうという誘惑にかられるであろう。しかし，さかのぼりすぎると，二人が離婚した原因は彼らが結婚したからだ，ということになってしまい，説明にならない。また，ソ連の場合を一つのタイプと考えられるか，という問題もある。ポンペイ型であれば，経済史を学ぶ者はアントウェルペンの没落のような事例を思いうかべることができるが，ソ連の崩壊に類似した事例はあるだろうか。多分，内的要因による突然の破局に最も良くあてはまるのは，株式市場の崩壊や金融恐慌ということになるであろうが，チューリップ恐慌や南海泡沫事件，さらには1929年の株式大暴落とソ連の崩壊を並べてよいかといえば疑問も残る。あえてソ連型と呼ばない理由である。

---

(12) William E. Watson, *The Collapse of Communism in the Soviet Union* (Westport, Conn, 1998); Ben Fowkes, *The Disintegration of the Soviet Union* (London, 1997); Walter Laqueur, *The Dream that Failed* (N.Y., 1994).

## 四

さて没落の諸類型について述べたので，次に歴史的に見た没落モデルに移ろう。(1)経済の繁栄 (2)消費の拡大 (3)軍事費の増加 (4)生産の停滞 (5)変革の必要と困難 (6)没落への道，という順に述べる。

### （1）経済の繁栄

出発点は繁栄している経済，あるいは経済成長をしている社会である。経済成長は全体だけでなく１人あたりの所得上昇を意味するが，分配は平等ではないから，特に近代以前の成長の初期には，社会の上層のみが豊かになることが多い。壮麗な宮殿や寺院の大伽藍，豪華な邸宅と高価な家具や食器などは，彼らが成長の果実を独占したしるしである。果実の一部は，富を守り，あるいは一層増大させるため軍隊の強化に使われることもある。そして一般民衆には，清貧の徳や節倹のすすめ，さらには現世よりも天国での幸福が説かれ，分配の不公平に目をつむり，貯蓄を増加させることが求められる。しかし，成長が継続すれば，いつの時代であれ，その利益はやがて一般大衆にも及ぶことになる。産業革命期の生活水準論争は有名であるが，イギリスの労働者の実質賃金が長期的に見れば上昇したことは否定できない。ジェヴォンズは，「アメリカやロシアはわれわれの小麦畑，オーストラリアは牧羊場，アルゼンチンは牛の放牧場」と云ったが，世界各地から流入する食料品のおかげで食料価格は下り，砂糖や紅茶の消費も増した。経済発展が一面では貧富の格差を拡大し，最下層に貧しい人びとを沈澱させながらも，大多数の国民に豊かな生活をもたらすことは，第２次大戦後のわが国においても実感されたところであろう。五賢帝の時代のローマ，黄金の世紀のオランダ，ヴィクトリア朝のイギリスにおいて，経済の繁栄は消費水準の上昇をもたらしたのである。(13)

### （2）消費の拡大

消費というとき，民間の消費と公共のそれとを区別する必要があろう。政府支出の拡大というと現代の話のようであるが，古代中世にも公共部門は存在したからである。ここでは民間の消費から始める。すでに記したように，成長の初期には上層階級が富を独占したとしても，それはやがて中下層におよんでくる。イギリスにおいて，きつね狩りやディナー・パーティーは上流階級のものであったが，ヴィクトリア朝の中産階級はそうした生活スタイルを模倣し，パーティーや家族旅行を楽しむようになる。18世紀初頭にはぜいたく品であった白いパンと紅茶は，やがて労働者の食卓にのぼるようになる。海水浴場の時代が始まり，競馬，競犬、プロ・フットボール（サッカー）のよ

---

(13) Mathias, *First Industrial Nation.*

うな大衆娯楽産業が生まれ，銀行休日（日曜日以外の休日）も制定された。食事，衣服，娯楽，休日などの習慣が，上層から下層へ伝わっていったことは，一般の人びとへも繁栄の果実がゆきわたっていったことを示す。ところで，かつてはぜいたく品であった砂糖や紅茶，あるいは肉やチーズが一般人の口に入り，労働者が休日を楽しめるようになることで話は終了しない。生活水準の上昇が庶民におよぶに至ると，社会全体は一層のぜいたくを指向する。『サテュリコン』のトリマルキオの饗宴ほどではないにせよ，われわれもベンツ、ゴルフ、グルメブームなどと騒いだことを思い出す。(14)

消費の拡大は民間にとどまらず，公共部門にも見られる。これは人びとの生活水準の向上が，政府サービスの拡大を求めるからである。守るべき財産を持つようになった人びとは消防や警察を求め，さらに生活環境の向上を望んで上・下水道，舗装された道路，街灯，公園，道路の清掃などを要求する。ローマはすでに消防兼夜警隊を持ち，水道橋が示すように上水道があり，下水溝もあった。カラカラ浴場に見られるような大公衆浴場があり，噴水のある広場や公共建造物も多い。これらの建設に費用がかかることは当然であるが，政府サービスの拡大は同時に役人の増加を意味する。生活水準は上昇しているので，役人の給料も上昇し，政府の支出も増加する。

経済の繁栄は下層にまでおよぶ，とは記したが，実は繁栄にとり残された者も存在する。ヴィクトリア朝のイギリスにおいても，ブースやラウントリーの調査が示すように貧困層が存在した。こうした人びとのため，古代であれば「パンとサーカス」が提供され，近代の豊かな社会は，生活困窮者の保護，老人医療費の補助，年金の給付などをおこなう。こうした社会保障，あるいは福祉関係の支出も増えるので，公共支出は一層増加する。しかし，いろいろな支出項目の中で最も目立つのは軍事費であり，これは別にして論ずる必要がある。(15)

（3）軍事費の増加

経済の成長期には，しばしば領土も拡大する。ローマ帝国しかり，スペインしかり，イギリスしかりである。われわれが問題とするのは，とりあえず，すでに守るべき大帝国を持っている場合で，前述のハプスブルク型にあたる。しかし，たとえ領土が拡大していなくとも，周囲には，より貧しい国や潜在的敵国が存在し，ぜいたくな生活を享受する国を狙っている可能性がある。繁栄する経済を守るための軍事費の支出は，消防や夜警への支出と同様，やむをえざる面がある。

軍隊のコストの第1は兵士の給料であるが，これは役人の場合と同様，生活水準が上昇しているので，それに応じて上昇する。低賃金におさえておいては，傭兵の場合は人が集まらないし，また

---

(14) Mathias, *First Industrial Nation*; Wernar Sombart, *Luxus und Kapitalismus* (Munchen, 1913), (金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』論創社)。

(15) Kindleberger, *World Economic Primacy*, pp. 28-31.

兵士の不満が高まれば反乱の危険がある。したがって兵士の要求は聞き入れられることが多い。ローマでは，インフレの時代，兵士たちは給料の増額を獲得したのみならず，インフレによる損害をこうむらないよう現物で給与を受ける制度もつくられた。これは役人にも適用されたが，食料供給や貯蔵のための巨大な機構がつくられることで，公共支出は一層増大した。

軍隊のコストのより大きな部分は戦艦や大砲のコストである。ハプスブルク帝国の財政難についてはすでに述べたが，兵器のコストは兵隊の給料よりも，はるかに大きな負担となる。兵器は改良が進むほど高価なものとなる。投石機より大砲は高価であり，しかも大砲を積むとなれば戦艦も大型化しなければならない。さらに戦争またはその危険があるかぎり兵力増強は避けられない。スペインと対立していた16，17世紀のイギリスにおいても，軍事力，とくに海軍が増強され，国庫の負担が増していたことは良く知られているが，こうした状況をより端的に示すのは第2次大戦後のソ連である。西側との対立の中で，核兵器の質を高め，量を増加する必要があったが，これは際限のない競争となる。ブレジネフの時代におけるソ連経済の後退は，明らかに軍備にお金をかけすぎたためであったが，それは西側の軍事力の一層の拡大を招く。とりわけレーガンやサッチャーのような指導者が現われて競争の激化がもたらされると，財政は破綻せざるを得なくなる。

こうした軍事費の拡大は，一般的に経済にいかなる影響を与えるか。戦争が技術進歩にプラスの影響を与えるという主張や，軍事技術の発達は民間用に転用され，経済発展にも良い影響を与えるという議論は多くあった。これは軍産複合体や死の商人の宣伝文句めいたところはあるが，20世紀の戦争の経験からして，一理あったかもしれない。ただ平和の配当に注目が集まる今日では，少々古臭い感じもする。ここでは軍事費の拡大という点にのみ注目するが，それが民間部門を圧迫すること，また軍事部門は必ずしも経済的効率に左右されないので無駄が生じやすいことは明らかである。もっとも，こうしたことは，経済が成長を続け，生産が拡大し続けていれば当面は問題にならないであろうが，実は生産の面でも好ましくない状況は生まれつつある。(16)

（4）生産の停滞

アメリカ経済の衰退が話題になった1970，80年代，アメリカでは労働者の質が落ちたことが指摘される一方，経営者側にも問題があるといわれた。経済の繁栄は，いつかは生産の停滞をもたらす。これを労働者の側の勤労意欲，経営者の側の企業家精神という観点から見よう。

プロテスタンティズムの倫理は，利潤を追求する資本家ではなく，勤労精神を持った労働者を育てた点が重要であるといわれる。繁栄する経済は，むしろ逆の傾向を助長する。衣食足って礼節を

---

(16) F. W. Walbank, *The Decline of the Roman Empire in the West* (London, 1946), (吉村忠典訳『ローマ帝国衰亡史』岩波書店)；Werner Sombart, *Krieg und Kapitalismus* (Munchen, 1913), (金森誠也訳『戦争と資本主義』論創社).

知るか否かは疑問だが，衣食足って勤労意欲が衰える，とくに辛い仕事や汚く苦しい仕事を嫌うようになるという傾向は広く見られる。ついしばらく以前のわが国でも，建設現場に外国人労働者が目立ったが，豊かになったシンガポールでも若者が肉体労働を敬遠し，インドネシアやマレーシアからの建設労働者が増加した。同様な事態は歴史上も，しばしば見受けられた。

辛く苦しい労働といえば，ガレー船の漕ぎ手などは最たるものであろう。ヴェネツィアにおいて14世紀初頭から，その貿易に活躍していたガレー船は，オールを漕ぐため多数の乗組員を必要としていた。はじめは自由人が漕いでいたが，やがて囚人や奴隷が漕ぐようになる。16世紀のうちに自由人は後退し，罪人を組織的にかり集めることが，漕ぎ手を集める公認の方法となった。やがてガレー船は時代遅れとなり，17世紀にはオランダやイギリスの船が，ヴェネツィアを海上から追いはらった。

ところで，新たに海上貿易の覇者となったオランダにおいても，同じことがくり返された。オランダの商船隊は初期には水夫の不足に悩まされることはなかった。しかし東洋への航海には半年以上もかかり，死亡者も多かったので，水夫のなり手は次第に減少し，外国人を雇わねばならなくなる。1775年（安永4年），長崎の出島に来た医師のツンベルク（彼自身，スウェーデン生まれ）の記すところでは，幕府との取りきめで船員はオランダ人のみのはずであったが，実際にはスウェーデン人，デンマーク人，ドイツ人，ポルトガル人，スペイン人，さらに34名の奴隷が乗り組んでいたという。水夫のなり手だけではなく，水兵になる者も少なくなった。18世紀中葉には，水兵募集のため，ハンブルク，ブレーメン，コペンハーゲンなどへ出向く必要があった。1780年，イギリスとの戦争が始まったとき，オレニエ公は「前の世紀には，一般の人の賃金は安く，人口は多く貧乏人も多かったから水兵を集めることが容易だった」と嘆かざるを得なかった。このようにして，経済の繁栄は辛い仕事や危険な仕事のなり手を減らすが，これは勤労精神の衰えのあらわれといえる。

これと平行して見られるのが企業家精神の衰退である。「ブッテンブローク型」のところで述べたように，イタリアでもオランダでも，豊かさの中で育った世代は，祖父や父の世代のように危険性のある事業に挑戦したり，自らの手を汚したりしようとしない。そして質朴さと倹約精神を失い，ぜいたくに溺れてゆく。ヴェネツィアでもそうであったが，オランダでも支配層は商業から手を引き，海上での危険を冒さず，土地や証券から利益を得ていたので，海の支配権が失われることを放っておいた。18世紀半ばにオランダ東インド会社の総督であったイムホフは，「われわれには良い船も，水夫も士官もない。こうしてオランダ勢力の主な支柱の一つが倒れてゆく」と云ったが，こうした嘆きは，たびたびくり返された。オランダが良い船を作れなくなったことには，「成功は失敗のもと」という要素も働いている。ヴェネツィアが，ガレー船を新しい設計の船になかなか切りかえられなかったように，オランダも，かつて最も優秀であったスタイルの船や航海術を捨てられなかった。しかし，ここには技術革新への挑戦を好まない三代目の心理が働いている。

三代目の心理が技術革新を拒むことを示す好例はヴィクトリア朝のイギリスである。イギリスで

は成功した産業資本家が地主ジェントルマンに成り上る例が多く見られた。アークライトやストラットも所領や土地の購入者の中に数えられる。イギリスでは家族企業が多く，株式会社になっても家族が株の大半を所有し，世襲的支配を続けていた。二代目三代目の所有者となると，工場は事業の中心というよりも，所領のような形で地主やジェントルマンに定期的収入をもたらすものとみなされた。したがって工場の設備更新への意欲もあまりなく，資金があっても安全な債券を買う方が好まれた。こうしてイギリスは技術革新に遅れをとることになる。労働者の勤労意欲と共に企業家精神が衰退して，生産の低迷が生ずるのである。(17)

（5）変革の必要と困難

今や経済成長は終了期にさしかかっている。消費は民間・公共部門の双方で拡大し，コストは上昇している。経済の繁栄を維持するためには，生産性を高め，成長を持続させる必要があるが，それには困難が多い。かつて成長をもたらした，さまざまな革新，その中には制度的なものも含まれるが，それらはもはや陳腐化してしまっている。さらに，世界の工場であったイギリスの例が示すように，かつての独占的地位は失われつつある。オランダが，イギリスの台頭する前には，世界の市場についての情報を独占していたことも思い出されるだろう。

ここで求められているのは，技術のみならず制度をも含めた革新もしくは変革であるが，それへの抵抗は極めて大きい。成功の思い出と新しい方法のリスクが変化を妨げるのである。ヴェネツィアの国営造船所で作られる軍用のガレー船の優秀さは良く知られていた。設計は洗練され，造船の技術と組織は完成され，製品は信頼できた。経験を積んだ支配人は，造船のコストと利潤を正確に計算し，百隻に一隻も誤ることはなかったといわれる。けれども大砲を備えた帆船の出現は，ガレー船を過去のものとしつつあった。しかし，ヴェネツィア人は，オールを備えたガレー船の方が，重火器をのせた帆船より敏速な行動がとれ，帆船が近寄れぬような海岸線を移動し，風上に向って直進できる利点を持つと考えた。そして海上では近接戦が行なわれなくなってきていたのに，ヴェネツィアは敵船に乗り移る旧式の戦術に固執していた。経験にもとづく確かなことを捨て，新しい種類の船と戦術に乗り出すリスクを冒すことは困難だった。ここには保守化と自己満足とが入り交っている。変化することは，自分たちのやり方の失敗もしくは敗北を認めることであり，伝統ののれんの誇りが高いほど，変革は難しい。

さらに目を拡げれば，ガレー船が時代遅れになった時期は，都市国家が時代に合わぬものとなっ

---

(17) William H. McNeill, *Venice : The Hinge of Europe, 1081-1797* (Chicago, 1974), (清水広一郎訳『ヴェネツィア』岩波書店) ; David Chambers and Brian Pullan, *Venice : A Documentary History, 1450-1630* (Oxford, 1992) ; Boxer, *Dutch Seaborne Empire* ; Mathias, *First Industrial Nation.*

た時代であった。スペインやフランスはこの地域を狙っていた。すでにミラノとナポリは外国の支配下に入り，次はヴェネツィアの番であった。しかし，ヴェネツィアの人びとは，イタリア統一などということを考えなかったし，たとえヴェネツィアが考えてもフィレンツェやローマ，その他いたるところで反対が生じたに相違ない。それぞれはイタリアの中の利益集団のような存在であり，自分たちの利益を損なうような改革のプログラムを受け入れるはずはなかった。そして，ヴェネツィアやフィレンツェの内部にも，もちろんエゴイスト集団が存在し，その利益を守ることに精力をそそぐ。経済の繁栄の中で，それぞれの集団の既得権益は成長し，また公共部門の拡大が，役所や軍をますます強大なエゴイスト集団に成長させている。すでに経済の拡大は終りに近いが，これらの集団はパイ全体の成長より，分け前を増やすこと，もしくは減らさないことに熱意をそそぐのである。[18]

（6）没落への道

こうした時期にいたると，社会全体に利己主義やぜいたく指向が蔓延する。皆が義務よりは権利を主張し，仕事よりは楽しみを求める。公共支出の増大は増税をもたらすが，とくに上層の人びとはそれを免れようとする。利益集団間の争いは激しくなり，公共心は失われる。改革は困難であり，外部からの攻勢にも弱くなる。16世紀初頭のヴェネツィアはまさにそうした状況であった。腐敗がひろがり，貴族は脱税を続けた。宮殿の会議用大広間は宴会場に改装された。「元老院議員たちは平穏無事に，かつ快適に国にとどまり，慣れたベッドで眠りたがり，同時に勝利を欲している。この両方を手に入れるのはほとんど不可能だ」と当時の人は述べている。[19]

ところで，このような時に戦争がおこったとすれば当然勝ち目はない。けれども敗戦こそ幸運の女神の贈り物という逆転劇が生じることもある。戦争に勝ってしまうと，旧来からの利益集団の地位は確固たるものとなり，長い目で見ると，「成功は失敗のもと」になりやすい。しかし，戦争に負けてしまえば，古くからの利益集団は一掃され，制度その他の革新も可能となる。生産設備の破壊のような物理的損害すら，新しい技術の採用を促進する効果があるかもしれない。第2次大戦後の日本やドイツに見られたこうした状況を，灰の中から甦る不死鳥になぞらえ「フェニックス効果」と呼ぶ。[20]

もっとも，幸運な敗戦に恵まれる例は，そう多くはない。むしろ，没落の道をたどり続ける方が一般的であろう。ただ，ここで注意すべき点は，没落といってもポンペイ型やソ連の場合のような突然の没落は稀れだということである。一般的には没落はそう急激なものではない。経済成長に長

---

(18) Olson, *Rise and Decline*; McNeill, *Venice*.
(19) Chambers and Pullan, *Venice*, pp. 66-84.
(20) Kindleberger, *World Economic Primacy*, p. 32.

い時間がかかるように，経済の没落も数十年や数世紀かかることもある。むしろ長い停滞期を経て，ゆっくり没落してゆくのであり，この停滞期こそ注目に価する時代といってよい。最後に没落モデルから離れ，停滞期もしくは長い衰退の時代に目を向けよう。

## 五

経済の停滞や没落が人気のあるテーマでないように，かつては停滞期は退屈なつまらない時代とみなされていた。洋の東西を問わず中世は停滞の時代というイメージから敬遠されがちで，フランス革命，明治維新，産業革命など変革の時期こそ重要だとされていた。しかし，変化の激しすぎる今日の時代に生きるわれわれにとっては，変化のない時代こそ新鮮に見える。こうして，ある時期から中世についての歴史書が書店の棚を賑わすようになった。同様に，フランス革命や明治維新がなぜ起ったかではなく，アンシャン・レジームや徳川幕府がなぜ続いたかに，人びとの興味が集まるようになった。

たしかに，中世や徳川期についての研究の多くは，それが暗黒の時代や停滞期ではなく，さまざまな変化に満ちた時代であったことを証明しようとしている。しかしそれは，封建制の衰退の中に資本主義の成長を見出そうとした成長指向の研究の流れを汲むものといえよう。むしろ興味を引くのは，停滞期とされる時代を否定的にとらえず，それが資源と人口，あるいは環境と人間との均衡がとれている状態であったとする見方である。例えばヨーロッパにおける三圃制農業は，8世紀に現われて19世紀まで続くものであるが，これを単に停滞的とするのではなく，耕地と牧場と森林とのバランスが上手くとれた農業と考えるような見方である。経済の繁栄の後に来る長い没落期あるいは停滞期を問題とする場合，このような考え方が大いに参考になる。(21)

私は学生のとき，三田で野村兼太郎先生の日本経済史の講義を聞いた。当時は徳川期の日本を封建的で停滞的とする見方が一般的で，野村先生も必ずしもそれに反対の立場をとられたわけではなかった。しかし，野村先生は江戸時代をそれほど暗い時代と考えてはおられなかったように思う。江戸時代は日本人にとって住みやすい時代であり，俳句や浮世絵にせよ歌舞伎にせよ，現在「日本的」と考えられている文化や生活の様式の多くは，この時代に生まれたのだと講義で云われたことが印象に残っている。(22)

私自身はアメリカ西部のフロンティアの発展を研究しながら，その陰で没落してゆく東部の農村にも興味を持った。19世紀後半の東部農村では人口は増加せず，地価の上昇もない。若者は西部や

---

(21) Regine Pernoud, Jean Gimpel, Raymond Delatouche, *Le Moyen Age pour quoi faire?* (Paris, 1986), (福本直之訳『産業の根源と未来』農文協)。

(22) 野村兼太郎『江戸』(至文堂，1958年)。

都会に出てゆき，農業発展もほぼ終了してしまっているからである。しかし，こうした農村での生活を，あまり暗いものと見るべきではない。残っている住民は，比較的大きな農場を持つ豊かな農民が多く，彼らは都会の喧噪や工場の労働とは無縁の落ち着いた暮しを楽しんでいた。そして家族や隣人とのつながりが，一見孤独に見える彼らの生活をささえていた。急激な変化や成長よりも，彼らは安定性を選択したのである。[23]

停滞期あるいは長期にわたるゆるやかな没落期は，文化的に見れば必ずしも衰退や堕落の時代ではない。ヒックスも『経済史の理論』の中で，「長い衰退の過程をたどる，あるいは衰退を享楽した」時期を「すばらしい時期であるかもしれない」と考えている。この時点に至ると「芸術は芸術のために，学問は学問のために」追求することが可能になるからである。[24] ルネサンスは高校の教科書には「近代の始まり」と書いてあるが，実際には「中世の秋」であった。ヴェネツィアにせよフィレンツェにせよ，経済的繁栄の終了した後にルネサンスの花が咲き誇った。モンテヴェルディのオペラなどは17世紀に入ってからのことである。こうした点については，商業的投資の対象が失われたため，資金が芸術に投じられたとする説もあるが，ブッデンブローク型の没落と見ておきたい。個別の家系を考えても，売家と唐様で書く三代目は，文化的観点からは高く評価されてよい。光琳はまさに三代目であるが，豪商雁金屋を没落させたとしても光琳の偉大さはゆるがないであろう。社会全体としも，果実の熟れる季節は秋である。ハプスブルク帝国の終末はシュンペーターを生み，イギリスの黄昏はケインズを生んだ。経済の没落や停滞は一様に嘆かるべきことではないのである。ひるがえって，今日のわが国を考えるとき，一流の芸術をも世界的経済学者をも生まずして，日本の没落などを語るのは，おこがましい限りではなかろうか。

（経済学部教授）

---

(23) Hal S. Barron, *Those who stayed behind* (Cambridge, 1984).

(24) John R. Hicks, *A Theory of Economic History* (Oxford, 1969), (新保博訳『経済史の理論』日本経済新聞社).